



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ファウスト・ヴランチッチの『五カ国辞書』とクロアチア語「チャ方言」の音韻特徴について
Author(s)	三谷, 恵子; Mitani, Keiko
Citation	スラヴ研究, 42, 87-100
Issue Date	1995
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5235">https://hdl.handle.net/2115/5235</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113389.pdf



# ファウスト・ヴランチッチの『五カ国辞書』と クロアチア語「チャ方言」の音韻特徴について

三 谷 恵 子

## 1. 『五カ国辞書』とファウスト・ヴランチッチ

1.1. 1595年、ヴェネチアで「ヨーロッパの最も名高き5つの言葉—即ちラテン語、イタリア語、ドイツ語、ダルマチア語、ハンガリー語—の辞書 *Dictionarium quinque nobilissimarum Europæ linguarum, Latinæ, Italicæ, Germanicæ, Dalmatiæ (sic!) et Ungaricæ*」(クロアチア語訳 *Rječnik pet najuglednijih jezika evrope, latinski, talijanski, njemački, dalmatinski, madžarski*. 第6版1992年、ザグレブ)が出版された。著者はシベニク(現在のクロアチア共和国内)出身のファウスト・ヴランチッチ (Vrančić, Faust 1551-1617)で、アルファベット順に記されたラテン語の語彙に、対応するイタリア語、ドイツ語、“ダルマチア語”、ハンガリー(マジャール)語の単語が並記された5言語対照語彙となっている。語彙項目数は約5千で、著者自身によるラテン語の序文、117頁の辞書部に加え、最後の11頁にはマジャール語に導入された“ダルマチア語”のリスト(pp. 118-122)、また聖書の「十戒」の一部と「主の祈り」に用いられている語句の各国語対訳(pp. 123-128)が添えられている。本稿の目的はこの『五カ国辞書』(以下『辞書』とする)を紹介することと、その中に記された「ダルマチア語」の言語的特徴を示すことにある。

1.2. 『五カ国辞書』の著者ファウスト・ヴランチッチは1551年、アドリア海の町シベニクに生まれた。16世紀初頭のハンガリー、トランシルヴァニアでは、急速に勢力を拡大してきたハプスブルグに対し、反ハプスブルグの土着の封建領主たちがトランシルヴァニアの大領主イヴァン・ザポリャ Ivan Zapolja (サーポヤイ・ヤノシュ)を国王として支持し対立する状況にあった。ザポリャは、ハプスブルグのフェルディナンドとの対決のためにトルコに援軍を求め、これがトルコ軍の進撃を招き1529年のトルコ軍によるウィーン包囲の直接の契機となったことで歴史に名を残しているが、『辞書』の著者ファウストの父ミホヴィル (Vrančić, Mihovil, 1507-1571)とその兄アントゥン (Vrančić, Antun, 1504-1573)はこのザポリャに仕えた人物である。アントゥン・ヴランチッチは、最終的にはハンガリーの首座司教をへて枢機卿となる高位聖職者で、後世には歴史家、詩人としても知られている。ファウストの父ミホヴィルが比較的早い時期に故郷シベニクに帰郷し、文筆活動などに従事したのに対し、生涯精力的な活動を絶やさなかった叔父のアントゥンは、はじめ、ザポリャの信任を得てヴェネチア、法皇庁(クレメンス7世)はもとよりジークムント王時代のポーランド、フランスはフランソワ11世の宮廷からヘンリー8世治下のイギリスまで、欧州各地の宮廷をザポリャの特使として回った。ザポリャは1540年に逝去、その後の内紛を経て1549年、アントゥンはハプスブルグのフェルディナンドのもとに赴き、以後こ

れに仕えることになる。1550年代と60年代には二度に渡り和平特使としてトルコに送られ、イスタンブールを始めトルコ各地に長く滞在した。こうした外交官としての経歴、ヨーロッパ各地から小アジアに至る様々な土地での体験が、後に旅行記や史書をうみだし、作家としての名を残させることにもなる。

このような家系に生まれ育ったファウストはイタリアのパドヴァ、ヴェネチアやローマ、ウィーンなどで哲学、数学、科学などの修業を積み、1594年に現在のハンガリー（チャナド）で司教職につくまでの20年近くの間、ハプスブルグ皇帝ルドルフ二世のもとで様々な役職につき、ハンガリー、トランシルヴァニアなどの領内各地を巡っている。学問に才能を発揮したファウストは、役職で赴いた滞在先の各地で様々な学者と親交をもち、自然科学、物理学や数学の研究に従事したという。プラハに滞在したおりに天文学者チコ・ブラーエや、若き日のケプラーとも親交があったと伝えられている。自然科学者としての才能は、『五カ国辞書』と同年にヴェネチアで出版された『新装置 Machinae novae』に示されており、「落下傘 (Homo volans)」や「鉄橋」のスケッチによって「ダルマチアのレオナルド・ダ・ヴィンチ」という後世の評価を与えられてもいる。また、ローマではティベレ川の河川工事、ヴェネツィアでは噴水の設計にも携わったといわれている。1594年チャナド（ハンガリー）の司教となるが、翌1595年にはパウロ会士としてイタリアにおもむき、ヴェネチアで後世に残る二つの著作、すなわち『五カ国辞書』と『新装置 Machinae novae』を出版する。この後はもっぱら学問と著述に専念し、1617年にヴェネチアで没する。

本稿で紹介しようとする『辞書』は、1595年のオリジナルの再版として1992年にザグレブで出版されたものである。再版された『辞書』は第6版と記されているが、実際には1595年のオリジナルの忠実な再版は1971年のものについて2度目である。この6版という数え方は次のようなものによる。初版から10年後の1605年に、プラハでベネディクト会派の修道士ペタル・ロデレッケル Petar Loderecker がファウストの辞書を元にしてチェコ語とポーランド語の対照語彙を加えた『七カ国語辞書 Dictionarium septem diversum linguarum』を出版した。これを第二版、さらに200年以上を経た1833年、現在のスロヴァキア共和国のブラチスラヴァで辞書編纂学者のトゥリェク J. Török がファウストの辞書をほぼ再現する形で『五箇国辞典 Dictionarium Pentaglottum』を作成しているの、これを第3版とする。そして第4版が1971年の再版、また1990年に Bridge という出版社から簡略版が出されているのを5版とする。

## 2. 『辞書』の特徴とチャ方言について

2.1.1 歴史言語学的にはダルマチア語という名称は、20世紀初頭までダルマチア地方に残されていたロマンス系言語の一つを指すのに用いられるが、『辞書』でファウストは故郷シベニクを含むダルマチア地方一帯で当時話されていた言葉を「ダルマチア語」と呼んでいる（『辞書』序文より）。これを現在の方言分布に当てはめれば、クロアチア北西部の一部ならびに沿岸部、島部に残されているチャ方言、あるいはこれと隣接するシト方言のなかでもチャ方言に近い特徴を持つ方言に結び付けられることは容易に予測できる。そして地理的な関係、特に、後述するようにチャ方言が古くは今日以上に内陸部にまで広がっ

ていたことを考えると、チャ方言との関係を考えるのが最も妥当と思われる。だが、この「ダルマチア語」とされた言葉は実際にどのような言語特徴を示し、現在のチャ方言あるいはシト方言とどの程度近い関係にあるといえるのだろうか。もちろん、『辞書』は歴史言語学的な資料として十分なものとは言えない。第一に、わずかの例外を除いて動詞項目は不定詞、名詞・形容詞については単数主格形が示されているのみなので、形態論的な要素(活用/屈折形)を知ることがほとんどできない。第二に、『辞書』の「ダルマチア語」が全面的に著者ファウストの母語に対する記憶に基づいて書かれたと仮定して、それがどの程度忠実に当時のシベニク一帯のダルマチア沿岸部の言語の実情を反映しているかはわからない。ファウスト自身、『辞書』の11年後に執筆した著作の序文で“子供のころに故郷を離れたためもあり、またこの言葉が今や「イタリア」語の影響を強く受けてしまっていることもあり、この言葉の本来の語を見つけるのに大変苦勞した”と述べているという(L. Jonkeによる『辞書』あとがきより p. 137)。しかしこれらのことを考慮に入れても、『辞書』が資料的価値を持たないということにはならないだろう。とりわけ、チャ方言を含む南スラヴ諸方言の地理的分布が15ないし16世紀を境に変動したという歴史的事実を念頭に考えれば、『辞書』が16世紀末のものであるという点は重要な意味を持つし、現在ではチャ方言というよりむしろシト方言の領域に含まれるシベニクで当時優勢だったのはどのような言語特徴なのかを知る一端としての材料を提供してくれると考えられる。同時代にこの地方で書かれた他の文献との比較対照を行えば『辞書』の有効性や欠点はある程度明らかになるだろう。しかしここではそのような比較は行わず、『辞書』を一つの言語資料とみなして、現在のチャ方言と比較してどのような共通点あるいは相違点があるかを見ていくことにしたい。

2.1.2 バルカン半島北西部の南スラヴ諸方言のうち、旧ユーゴスラヴィア一帯で主として使用されている言語—セルビア・クロアチア語と呼ばれてきた言語—は、方言学的には大きくシト、チャ、カイの3つの方言に区分される。この区分は「何」という意味の疑問代名詞の形にそれぞれ *što* (<\*čb-to)、*ča* (<\*čb)、*kaj* (<\*kъ-j-) を使用することに由来する。これらの方言はまた、共通スラヴ語の\*ěの反映形が *e* となるエ方言、*ije/je* となるイエ方言、*i* となるイ方言、これらの混在するエ-イ方言などに分類される。そこでこの二種類の特徴を標識として、シト方言-イエ方言、チャ方言-イ方言などと呼ばれる。

ファウストの出身地シベニクはクルカ川の河口南側に位置し、現在の方言地図ではシト方言が海岸にまで到達し、沿岸部に南北に伸びるチャ方言を分断する地域に当たる。シト方言の中で、現在の標準語(標準クロアチア語、標準セルビア語)の基礎となった東ヘルツェゴヴィナ方言は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの中央部を除く大部分と、カイ方言以南のクロアチア、南はツルナ・ゴーラからセルビアの南西部にかけて広く分布する。またシト方言-イ方言(*što* を使用し、かつ\*ě>*i* の特徴が現われるタイプの方言)の領域は、チャ方言領域と接しながらクロアチアを北から南に伸び、シベニクのあるクルカ川河口南側から内陸部に広がってさらにボスニア中部とヘルツェゴヴィナ北西部一帯に分布する。一方のチャ方言は、クロアチア北西部の内陸に一部見られるほかは、イストラ半島から南はスプリット、コルチュラ島、ラストヴォ島に至るまでのダルマチア海岸部および島部にわずかに分布する方言である。

南北に細長く伸びるチャ方言は、いくつかの音韻的な標識によってさらに細かく下位区分される。その際重要な標識になるものの一つが\*ěの反映形で、Belić(1925)はこれによってチャ方言を大きく3つに、Peco(1985)は4つに、Brozović(1988)は6つに区分している。(それぞれの詳細な分類はここでは示さないが、ěの反映形については2.2.2の(4)の項で扱う)

バルカン半島における南スラヴ語の諸方言は、オスマントルコによる支配の時代の住民の移住という特有の歴史的背景もあって、15世紀に先立つ時代の方言分布と後の発展の関係が入り組み、もともとの分布が不明瞭になっている場合が多い。チャ方言も例外ではなく、15世紀までのチャ方言とシト方言の境界がどのような形をとっていたかを厳密に定めるのは困難とされる。チャ方言は、上述したように、今ではバルカン半島北西部の沿岸部にごくわずかに残されているにすぎないが、古くは現在よりはるかに内陸部にまで分布していたと普通考えられている(Peco 139; Brozović 1988: 81)。Brozović(1988)は、境目目は明確なものではないと断わりながら、ウーナ川をチャ方言とシト方言の北の境界、またウーナ川を遡る線からツェティナ川を結ぶあたり、すなわちおおよそ現在のクロアチアとボスニアの境界の西側を元来のチャ方言のコンパクトな領域のめやすとしている。またさらには、ネレットヴァ川からヴルヴァス川を結ぶ線の西側、つまり現在のボスニア・ヘルツェゴヴィナの西半分までがチャ方言の本来の領域だったとする考えもある。古くはVuk KaradžićやMiklošićが“ボスニアの方言はもともとのチャ方言がシト方言化したもの”(『セルビア化したクロアチア人』)であると主張したし、Belićも『セルビア語方言地図 Диалектологическая карта сербского языка』(СПб., 1906)ではシト方言のイ方言は内陸部のシト方言(エ方言)にチャ方言が影響を与えて成立したという考えを示した(Долобко 1914:220)。これらの考えはチャ方言、とりわけ\*ěの反映形にiが現われる中部チャ方言(イ方言)と、これと接しさらにボスニア・ヘルツェゴヴィナ南西部にかけて分布するシト方言-イ方言に、\*ě>iの他にも\*stj, \*skj>šč(ščakavizam)、\*dj>j、\*je>ja、\*jdおよび\*jtの保持(その他のシト方言では>d', t')のようないくつかの共通点が見られることに依拠しており、Rešetarはボスニアのシト方言-イ方言をすべてシト方言化したチャ方言と見ることには疑いを示しつつも、ボスニア南西部のイ方言にみられる\*stj, \*skj>ščのščakavizamの特徴に基層としてのチャ方言の痕跡を見ている(Rešetar 165)。

けれどもシト方言-イ方言の音韻的特徴、たとえばščakavizamをチャ方言の影響と考えなければならない必然性はない。そもそもこれらの方言は、さまざまな等語線を描く中間的方言を挟んで連続的に変化する一まとまりの方言グループであったという見方も成り立つ。\*ě>iの反映形やščakavizamの特徴などを共有していたこれらの方言の中で、チャ方言の方は古い3アクセント体系(長い下降、短い下降と曲アクセント)や共通スラヴ語から受け継いだ古いアクセント位置などの音要素を保ったまま分布領域を海岸部へと狭め、一方のシト方言-イ方言はもともとチャ方言の領域であった西のほうに進出しながら、新しい特徴を獲得して行ったと見ることのできるのである。したがってこの立場からすれば、Ivić(Ivić 68)が指摘するように、15世紀以前の両方言の厳密な境界を問うこと自体、大した意味をもたないことになる。

## 2. 2. 『辞書』の特徴

2.2.1. 方言について考察する場合、アクセント、音韻的特徴、形態的特徴はいずれも重要な要素となる。特にアクセントは、しばしば音韻論的特徴や形態論的特徴に先行する重要な要素となる。チャ方言では特に、古い三アクセント体系や古いアクセント位置が保持されていることが指摘される。『辞書』ではアクセント記号らしきものが振られている例(Dā, Vrá など)が若干あるが、数は多くないし首尾一貫しているわけでもない。したがってアクセントに関する問題はあつかうことはできない。また形態論的特徴も、わずかの例を除いて名詞、形容詞は単数主格が、また動詞は不定詞が示されているのみなので記述することはできない。これらの理由から以下では、表記上から読み取れる範囲での音韻論的な特徴に注目し、現在のチャ方言の特徴と比較していきたい。

まず、『辞書』の表記法の特徴を示す。本節では、現在の音声的正書法による表記(字母)と『辞書』に見られる表記のパターンとの比較のみを記し、音韻論的な意味は後節で扱うこととする。なお本稿では『辞書』に見られるものは『辞書』の綴りのとおりに示し(イタリック)、必要に応じて〈 〉に現在の表記法に標準化したものを、また( )に標準クロアチア語(シト方言-イエ方言)の対応する形を示す。\*つきのものは共通スラヴ語の形とする。

『辞書』の表記の中で、母音字母 a、e、o ならびに子音字母 p、b、d、f、h、k、l、m、n、r は現在の正書法のそれぞれの字母に対応する。現在の標準語の字母 i、j、u、c、č、ć、dj(d)、g、lj、nj、s、š、z、ž、t、v は『辞書』では異なる表記、あるいは複数の表記によって示されている。なお現在の字母 dž は音素 /ǰ/ を表わし外来語にのみ現われるが、チャ方言では普通 /ž/ にマージしているとされる。『辞書』でこれに相当する例は Xep <žep (džep) ポケット〉のみ。

『辞書』の表記の例

/c/: cz, z, cβ

cz: *Czelivati* (celivati); *Czidilo* (cjedilo); *Czrikuva* (crkva); *Czvižtk* (cvijetak);  
*Czvaβti* <cvasti (cf. *Zvaβti*)>; *Dicza* (djeca); *Ticzati* (ticati); *Ovcza* (ovca); *Otacz* (otac)  
 ただし *Oczito* (očito. cf. *Ocsito*)

z: *zvaβti* <cvasti>

cβ: *gatavacβ* <gatavac 占師>

/č/: cs. *Csa* (ča. quid); *Csefaly* (češalj); *Csefzati* (česati); *Csitovat* (čitovat); *Placs* (plač); *Ocsito* (očito); *Csarv* <čarv (crv)>; *Csarn* <čarn (crn)>; *Csarnilo* <čarnilo (crnilo)>

/č/: ch, chi, chy

ch: *Vecheer* <večeer (večer)>; *Lupefchina* <lupeščina 盗み>; *Vruchina* (vručina);  
*Pomochi* (pomoci)

chi: *Szidaliſchie* <sidališće>; *Obechiati* (obečati)

chy: *Plechya* (pleča); *Plachya* (plača); *necsiβtochya* (nečistoča); *Baſchyenik* (baščenik); *Ognischie* (ognišće)

- /t'/ *tj, ty, thy*  
*ty: Bitye* (biće); *Pitye* (piće); *Lahkotya* (lakoča); *Ođitya* (odjeca. cf. *Ođitja*);  
*tj: Ođitja; Tankotja* (tankoča)  
*thy: Obrathyati* (Obračati)
- /dj/: *dy: Gradyanin* (građanin); *Potvardyenyje* (potvrđenje)
- /j/: *y: Yama* (jama); *Yednocs* <jednoč (jedanput)>; *Loy* (loj); *Szyednacsiti* (sjednačiti);  
*Razbiyati* (razbijati); *Tuy* <tuj (tuđ)>
- /i/: *i のほか* *y, yi, ij, gy, gi*  
*yi: Yinako* (inače)  
*y: Klaniatybe* (klanjati se)  
*ij: Vijk* <vik (vijek)>; *Lijn* (lijen)  
*gy: Gyztino* (istino); *Gyzbina* <izbina (jezbina)>  
*gi: Gizkra* (iskra); *Ginako* (inako)
- /lj/: *ly, gly*  
*ly: Kosulya* (košulja)  
*gly: Seglyvv* (šaljiv); *Nevoglya* (nevolja)
- /nj/: *ny, ni*  
*ny: Puczanye* (pucanj); *Knyige* (knjige)  
*ni: Klaniatybe* (klanjati se)
- /s/: *sz, fs, fz, ff, s, β, z.*  
*sz: Szarp; Szith* (sit cf. *Na-βititi*); *Szuhota* (suhota); *Sztolicza* (stolica); *Szkular*  
(skular); *Szluxiti* (služiti); *Pizmo* (cf. *Piztat, Piβati, Pizanye*); *Csasz* (čas)  
*fz: Izufa* (suša); *Izichi* (sići); *Nafzlidovati* (nasljeđivati); *Kafzan* (kasan); *feefzt*  
(šest); *Vefzéliiti* (veseliti)  
*fs: Kufsati* (kusati)  
*ff: Kuffanje* (kusanje); *Priblixati ffe* (približati se)  
*s: Skakati* (skakati)  
*β: Na-βititi* (cf. *Szith*); *Szeβti* (sjesti); *Piβati; Oβtaviti* (ostaviti)  
*z(zk, zp, zt の結合で): Gyztino* (istino); *Linozt* (ljenost); *Sezt-nadezte* (šesnaest),  
*Sezdezet* (šezdeset); *Gradzki* (gradski)
- /š/: *s, f, ff, ss, S*  
*s: Salacz* (šalac); *Kosulya* (košulja); *Tesko* (teško); *Schyaap* (ščap); *Schit* (ščit)  
*f: Oftrō* (oštro cf. *Ostrō*)  
*ff: Kuffanye* (kušanje)
- /u/: *u のほか* *v, vv*  
*u: Luk, Tarbuch* (trbuh)  
*v: Vmitelyan* (umiteljan); *Vcsinit* (učinit); *Vrá* (ura)  
*vv: Yednastvvo* (jednastvo); *Pravv* (prav); *Xivv* (živ)
- /z/: *z, sz*

z: *Zora*; *Zlato*  
 sz: *Sznamenouan* (znamenovan); *Sznamenovati*  
 /ž/: s, x  
 s: *Szlusba* (služba)  
 x: *Vtaxenye* (utaženje); *Sznaxan* (snažan); *Szluxiti* (služiti)  
 /g/: g のほか gh: *Biligh* (biljeg)  
 /t/: t のほか th: *Pechath* (pečat); *Bogath* (bogot)

### 2.2.2. 『辞書』に見られる音韻的特徴

チャ方言にはいくつもの下位方言があり、細かく見ればそれぞれが他と異なる様々な言語特徴を有している。しかし、チャ方言全体、あるいはその中の多くの方言群に共通する特有の現象としていくつかの音韻特徴を列挙することができる。チャ方言を特徴づけるそのような事項を以下に列挙し、各々について『辞書』ではどのようなことが言えるかを示す。なお、チャ方言については主に Ej (Brozović 1988)、Peco (1985)、Belić (1925) の記述に依拠した。

#### (1) 疑問代名詞 ča < \*čb

疑問詞 ča の使用は、名称の由来でもあるチャ方言の特徴で、シト方言の što、カイ方言の kaj に対応するが、他の方言との接触の影響で ča を使用しない地域もある(ダルマチア南部では što、あるいは šta を用いる。イストラの北東部ではカイ方言の影響で kaj を用いる)。ča の使用はこの方言に共通する一つの指標ではあるが、もちろんそれのみで方言区分が決まるわけではない。『辞書』では疑問代名詞「何」(lat. Quid) は *Csa* <ča>、*Itō* <što> の二つが記されている。また「なぜ」(lat. Quare)、「なぜなら」(Quia) にも *Zaacs* <zač>、*Zafto* <zašto> が見られる。その他、*Zafto ne*、*Sto-godir* (što god) など。一方 ča は *Csa barxē* <ča barže (što brže)> 「できるだけ早く」に現われる。

#### (2) \*b、\*b の反映形

共通スラヴ語の jers(\*b、\*b)のチャ方言の反映形は大部分シト方言と同じで、いわゆる「強い位置」でともに a: \*dьnь > dān、\*pьsь > pās; \*lьžь > lāž。北西部には半母音の ə が e になるケースがある: meč (= mač) (Belić 1909: 188)。ə が e になる反映形は『辞書』では見られない。

シト方言やカイ方言と共通して \*b、\*b の反映形で興味深いのは、弱い位置に現われた古い半母音の ə (<\*b、\*b) が消失せずに完全母音化するケースである。この条件には次のようなものが考えられる (Ej 8; Carlton 1990: 327): (1) 語頭音節にある ə (<\*b、\*b) が新たに短い下降の鋭アクセント (´) をもつに至った場合: \*tьrešь > tārēš、\*mьjn'ь(jb) > mājji; (2) 語頭の m、l の後ろ: \*lьgati > ləgati > lāgati、\*mьgla > məgla > māgla。チャ方言に典型的に現われるケースに mьlin > mājlin, melin; manon (この語末の n はいわゆる 'アドリア化現象'; 後述(12)) <manom (= mnom. 1. sg. instr.); pasa (gen. sg. <pas. シト方言標準形は psa); (3) jers が消失すると語頭に 3 つ以上の子音連続が来る場合(摩擦音+閉

鎖音+ソナントの場合は別) : \*dʲska > daska, \*stʲblo > stablo.

『辞書』で \*ʲ, \*b > ə > a (弱い位置の母音化) に該当するものには次のケースがある : *magla*, *malin* ; 語頭に子音連続がくる場合その間 : *Takati* (tkati < \*tʲkati 織る), *Takacs* (tkač < \*tʲkati の行為者名詞) ; 接頭辞 sʲ- をもつもの : *Szatreepti* < satresti (stresti) ; *Szatvar* (stvar) ; *Szamiriti* < smiriti (smiriti) . ただしこれらの a が挿入される例と並んで *Sztoriti*, *Sztrepti* の形も見られる。

### (3) \*jʲ の結合

\*jʲ > i が標準的な反映形。『辞書』では語頭の /i/ は /iz-/ の場合全て i で表記される : *Iz-zuti* (izuti 履物などを脱ぐ) < \*jʲzuti ; *Iz* < iz 前置詞 (< \*jʲz) 。それ以外の場合は *gy-*, *gi-ji* と表記される : *Gigrá*, *Gygra* (igra), *Gigrati* (igra), *Gigrati* (igrati < \*jʲgrati) ; *Gimati* (imati < \*jʲmati) ; *Gyme* (ime < \*jʲme) , *Gymenovati* (imenovati) ; *Gizti*, *Gifty* < jisti (isti 同じ) < \*jʲstʲ ; *Gyztina* < jistina (istina) .

さらに『辞書』ではつぎのような場合も *Gy*, *Gi* と書かれている :

\*jě > ji (イ方言化) : *Gidro* (jedro 帆 < \*jědro 核、芯) ; \*ě > ji : *Gyfti* (jesti 食べる < \*ěsti)

\*i > i : *Gizkati*, *Gizkanye* (iskati, iskanje < \*iskati)

ただし *Jagla* < jagla (igla 針) < \*jʲgʲla. (jagla はチャ方言の形として Kopečný (140) にも挙げられている)

### (4) \*ě の反映形

チャ方言の \*ě の反映形は大体の傾向として、北西部チャ方言(イストラ半島東部からリエカ周辺、イストラ半島に近いツレス島など)で e、ラストヴァ島(チャ方言最南東の島)で je となる (jekavizam) (Peco 1985: 148; Ej 82-83)。これ以外のダルマチア沿岸部の大部分の中部チャ方言では基本的に i (ikavizam) となる(イストラ半島東部にはシト方言のイ方言が分布する)。ただしイ方言の中でも北~中部地域では \*ě > e の反映形がしばしば現われる。そのため、この一帯の方言をイ-エ方言として区別する考えもある (Peco 146 ff)。この現象は、後続する音節が「歯茎音の t, d, s, z, n, l, r + 後方母音 (a, o, u) または ∅」という環境で \*ě > e (ex. koleno, leto, ded, testo, rezati, delo, mera) になると説明される。いわゆる「ヤクビンスキー・メイヤーの『法則』」。ただしメイヤーの場合 ekavizam が起こる環境に m が後続する場合も含まれるという(たとえば 'nem < \*němʲ 啞' cf. Samilov 52)。一方北部のエ方言にも、\*ě > i のようなイ方言化が見られるが、この場合には上述の \*ě > e の起こる位置とは逆の場合すなわち「歯茎音の t, d, s, z, n, l, r + 後方母音 (a, o, u) または ∅ 以外」の位置でこの傾向が強い (ex. vrime, dica, dite, rika, brig) とされる。南のイ方言領域でも散発的にエ化がおこるが、この場合上記の「法則」に当てはまる位置ではほかの場合より起きやすい(たとえば seno, selo, venac) 程度のことは言えても、特定の音韻論的に規則づけられるような交代と言うものではないように見える。

『辞書』では次のような事柄が指摘できる :

(a) \*ě > i の反映形が安定して現われる。

例： *Tilo* (tijelo <\*tĕlo 体); *Tiftò* (tisto (tijĕsto <\*tĕsto 練り小麦粉)); *Biβan* (bijĕsan); *Vrimĕ* (vrijĕme); *Grih* (grijĕh); *Orih* (orah <\*orĕchъ); *Promina* (promjena); *Pina* (pjena <\*pĕna); *Szikira* (sikira (sjekira 斧)); *Sztina* (<\*stĕna); *Kolino* (koljeno); *Lito* (ljetto); *Vitaar* (vjetar); *Lipota* (ljepōta); *Hotiti* (hotjeti); *Mido* (mjed).

長母音が *i* または *ij* で示されるケースがある (全てではない)： *Bliid* (blijed <\*blĕd); *Riicz* (rič (riječ)); *Lijp, Liip* (lijep).

(b) \*ĕ > i にならないケースはごくわずかである：(a)\*ĕ が e で綴られている例は *Szufzed* (sused (susjed)); *Szufzedfztvo* (susedstvo (susjedstvo)); *Verovati* (vjerovati); *Celovati, Celivati* (cjelivati); *Szeno, celivati* 以外、ヤクビンスキー・メイヤーの法則の位置に合致するとはいえる。(β)ĕ > ie になる： *Szvieβt* (sviest (svijest))

#### (4) \*e, \*q

鼻母音 \*e のシト方言における標準的な反映形は e。チャ方言でも同じく e だが、j、ž、č に続く位置で e > a が見られる：ex. *jazik* (シト：jezik, cf. OCS językъ, r. язык)。この傾向はカイ方言やシト方言-イ方言 (西部) にも若干見られる (prijeti; jačmen オオムギ) が、チャ方言において最も顕著に現われる。今日ではシト方言の影響によりこの傾向は弱まり、あまり使用頻度の高くない語に保たれているだけだが、本来すべての ča 方言に共通する特徴とされる。鼻母音 \*q は基本的に > u で、シト方言と共通する。ただし北西部では \*q > a、o も見られる。

『辞書』では j、ž、č に続く位置でも \*e > e が大勢： *Pocseti* (početi <\*početi); *Xeti* (žeti <\*žeti 刈り入れる); *Xedyati* (žedjati <\*žedati); *Yeczmen* (ječmen); *Preβti* (<\*prešti 紡ぐ)。

口蓋音のあとの \*e > a は *Jazik* (jezik); *Jazičan* (jezik); *Jati* (uzeti <\*jĕti)、*Priyati* (<\*priĕti) に見られる。

#### (5) \*l̥, r̥ の反映形

(a) \*l̥ > u となる変化はシト方言と共通。\*l̥ > u の移行は 15 世紀初めころを境とする (Ej 9; Shevelov, 476)。ただしチャ方言では部分的に l̥ が保たれる：puln = pun。

『辞書』では \*l̥ の反映形は二通りの表記：u, l で現われる。

l̥ > u: *Puuk* (puk 民 <\*pъlkъ); *Dugh* (dug <\*dъlgъ); *Szuncze* (sunce <\*sъlnъce); *Vuna* (<\*vъlna); *Mucsati* (mučati <\*mъlčati)。

l̥ > l: *Puln* (pun <\*pъlnъ), *Na-pulniti* (napuniti); *Sztulp* (stulp (stup 柱 <\*stъlbъ))。これらは古いチャ方言の特徴の名残りであろうが、l は綴り上残っても実際の発音は [u] であったかもしれない。

(b) \*r̥ はシト方言では r (r̥) だが、チャ方言ではしばしば、母音+r (ar, er) となる。この特徴は『辞書』においては首尾一貫して現われる： *Arvati* (rvati <\*rъvati); *Argya* (arja (rđa) <\*rđja, cf. slv. rjā 錆); *Obarv* (obrva <\*brъvъ); *Karvv* (krv <\*kry); *Karβt* (krst <\*krъstъ); *Garlo* (grlo <\*gъrlo); *Zarno* (zrno <\*zъrno), *Tarpko* (trpak, trpko. 洗い、酸っぱい <\*tъrpъkъ); *Parvi* (prvi <\*pъrvъ); *Markva* (mrkva <\*mъrky)。ただし

*Czrikva* <crikva (crkva < \*cъrky)>

(6) \*t', \*d' および \*st', \*žd'

(a) \*t' の反映形はチャ方言で t'[tj-]; カイ方言で č、シト方言および南部のカイ方言で ě というのが代表的とされる: ex. netjak (nečak 甥)。『辞書』では 2.2.1 にも示したように、\*t' に対応する表記に tj/ty- と chy (č) が見られる。

t-タイプ: *Oditya* <oditja (odječa)>; *Teskotya* (teškoča); *Dragotya* (dragoča); *Platya*, *Platchya* (plača); *Obrathyati* (obračati); *Szmetye* (smeće ごみ); *Pitye* <pitje (piće)>; *Navrathenye* (navračenje).

ch-タイプ: *Szvichya* (sviječa); *Ne-csiſtochya* <nečistoča>; *Tiſuchya* (tisuča); *Pluchya* (pluča); *Obechya* (obječati); *Machyeha* (mačeha); *Gachye* (gače ズボン)。

これで見える限り、ty/tj と書かれたものも chy- と区別なく [č] と発音されていたのかとも考えられる。自由変音と理解しておくのが妥当か。

(b) \*d' の反映形はチャ方言で j (カイ方言西部と、部分的にシト方言西部にもこの反映形は現われる。この反映形は言うまでもなくスロヴェニア語への連続性を暗示する); シト方言 đ; カイ方言東部 dž というのが代表的: ex. meja (međa 国境、境界)

『辞書』で \*d' > j は以下の場合: *Mešs* <mejas (međaš) 境界標識 (石など)>; *Szaye* (sađe 果物); *Meu* <meju (među)>; *Tuy* (tuđ 異国の、見知らぬ), *Potuiti* (potuđiti); *Takoyer* (takoder)。

\*d' > đ は: *Orudye* (oruđe 道具); *Rodyenye* (rođenje); *Xedya* (žeđa), *Xedyati* (žeđati 渴いている); *Neuidyen* (neviden)。

(c) \*št', \*žd' のチャ方言の代表的な反映形はそれぞれ st' または šc と žj. シト方言東部では št' の連続は異化作用によって št となったが、西のイ方言では šc というシチャ化が見られる。št' から šc、št への分化は 12 世紀以前に生じていたと言われる (EJ 11)。

『辞書』でも明瞭なシチャ化の特徴が見られる: *Baſchina* <baščina (baština) 遺産>; *Dopuschyenye* <dopuščenje (dopuštenje)>; *Kliſchya* <klišča (klijesta やつとこ)>; *Schyediti* (ščediti (štediti)); *Plasch* <plašč (plašt) マント>

\*žd' > žj の例: *moxgyani* <možjani (moždani) 脳の>。これは gy の表記が /j/ に対応するという理解の上での判断である。

(7) \*čr, \*čr̥. シト方言では 14 世紀ころ \*čr, \*čr̥ > cr, cr̥ に変化する (EJ 12) が、チャ方言ではこの古い結合が保たれる: ex. črn (crn)。『辞書』は一貫して čar である: *Csarv* <čarv (crv)>; *Csarlyenitſe* <čarljeniti se (crveniti se)>; *Csarlyen* <čarljen (crven)>; *Csarn* (crn); *Csarniti* (crnjeti)。

(8) \*jt, \*jd. シト方言では 14 世紀前後に \*jt, \*jd はそれぞれ ě, đ に変化した: najti > naći。チャ方言では jt, jd を保持する (EJ 12; Ivič 1958: 69)。『辞書』も jt を保持している: *Nayti* <najti (naći)>; *Poyti* <poiti (poći)>; *Doyti* (doći)。\*jd は例なし。

(9) \*vs-. シト方言では13-14世紀のころに\*vs->sv-の転換が起こった：vse>sve. これに対しチャ方言の多くではこの転換が起こらない。『辞書』では *Vaβ* (sav 全て) にこの名残が見られる。ただし *Szvemoguchi* (svemoguć 全能の), *Szvi* (svi 皆), *Szvaki* (svaki)。

(10) いくつかの子音について

① 本来なかった/f/は、他のスラヴ語の場合同様外来語として入ったが、シト方言では/v/、あるいは/p/にマージした：Stefan>Stepan. チャ方言、カイ方言では/f/はそのまま定着し、場合によってはある種の子音結合に取ってかわったケースもある：upvati se>ufati se (望む)；hvala>fala. 『辞書』にも *Vffati* <ufati>, *Vfanye* <ufanje> がある。

② /h/はシト方言、カイ方言ではしばしば欠落する。この傾向は特に17世紀以降現われる：ajina (=haljna), oladiti (=ohladiti). チャ方言ではhは比較的よく保たれると言われる。『辞書』の中では、今のシト方言には失われている/h/が現われるものに *Lahko* (lako); *Mehkak* <mehkak (mekan?) 柔らかかな>; *Mehkota* (mekoča)。

③ 音節末のソナントlはシト方言ではoになるが、チャ方言ではlが保たれる。これに該当する『辞書』の例は：*Pakal* (pakao); *Oľzal* (osao); *Vzaal*, *Vzaly* (uzao); *Poβal* (posao); *Dil* (dio). ただしこれもjの場合同様、lの綴だけ残って実際には[o]になっていたかもしれない。

(11) 語頭の\*vь-, \*vь- および前置詞の\*vьはシト方言、カイ方言ではuに変化したが、チャ方言では[v]が保持される。『辞書』では *Vazeti* (uzeti <\*vьzeti). また、*Vcsera* (<\*vьčera); *Vnuk* (unuk <\*vьnukъ) などもあるが、ただしこれらの場合、vの綴りが[u]と発音されていた可能性は十分ある。例えばVが/u/に対応するものに *Vβta* (usta); *Vra* (ura 時) などがある。

(12) いわゆるアドリア化現象 (またはダルマチア化現象) と呼ばれる一群の音変化がある。

(a) 語末のmがnになる、あるいは鼻音化するか、鼻母音になる：(ja) san=(ja) sam; vidin (=vidim. 1. sg. pres. <vidjeti 見る); lom̄in (=lomim. 1. sg. pres. <lomiti 折る); v̄an (=vam 二人称代名詞複数与格); nožę (=nožem. instr. sg. <nož); rukq (=rukom. instr. sg. <ruka) (Belić 194; EJ 18). Belić (1909) は語末だけでなく音節末に起こる場合も挙げている：uzanka (シト.=zamka). またこのm~nの交代は変化語尾の最後に現われるのが特徴で、例えば主格単数がmで終わる名詞の場合、その主格形には現われないとされる：dim, osam (din, osan にはならない). 同じ現象は南ダルマチアから西ヘルツェゴヴィナにかけてのシト方言-イ方言にも見られ、多くの学者はイタリア語の影響とみなしている。『辞書』ではこのm~nは (少なくとも表記上は) まったくない：manom (=mnom. 1. sg. instr.); naam (nam 1. pl. dat.); Yaa-yeβam (Ja jesam); Veruyem (vjerujem <vjerovati. 1. sg. pres.).

(b) l'>jになる場合がある：jubav (=ljubav). 『辞書』でも *Yubiti* <jubiti (ljubiti)> にその特徴が見られる。ただし *Lyubovnik* <ljubovnik>; *Lyubeznivo*; *Lyublyen* などもある。

(c) チャ方言のイ方言に見られる特徴として gl-, kl- が前母音の前で glj-, klj- となる

ケースがある。『辞書』では *Glyedati* <gljedati (gledati)>, *Poglyedan*; *Poklyiszaar* <pokljisar (poklisar 使者、大使)> の3例がこれに該当する。

(13) いわゆる cakavizam. 口蓋音の č, š, ž が脱口蓋化して c, s, z になるもので、m~n の交代とならび、アドリア化現象の代表的な特徴とされる。チャ方言ではしばしば、c : č, s : š, z : ž の対立が中和され、それぞれ c (まれに ċ), š, ž で表現されることがある。この現象については『辞書』からは事例を上げることはできない。『辞書』では特に摩擦音系統の子音の表記に複数のパターンが用いられているが、実際の音価を反映して書き分けているとも考えられない。

### 3. 結 び

本稿では『辞書』ならびにチャ方言に見られる様々な音韻特徴を、その言語学的な意味づけを問うことなく列挙した。一つの資料の提示に過ぎないが、以上で見てみたことをまとめれば、『辞書』にはシト方言の特徴である疑問代名詞の što や \*dj > d̥ (dy) など、チャ方言に典型的ではない要素の混入がいくらか見られるものの、現在のチャ方言-イ方言の音韻論的特徴と明らかに共通する点がかかなりあると見ることができる。ことに \*ě > i の ikavizam や、/čr/ の保持、ǰ > ar などのチャ方言特有の際立った特徴はほぼ一貫して保っている。『辞書』がファウストの出身地シベニクの16世紀当時の言語の状況をかなり反映しているとするれば、この地域は当時明らかにチャ方言の領域であったとすることができる。

### 参考文献

*Dictionarium Quinque Nobilissimarum Europæ Linguarum, Latinæ, Italicæ, Germanicæ, Dalmatiæ, & Ungaricæ.* Zagreb, Novi Liber, 1992.

Белич, А., “Замѣтки по чакавскимъ говорамъ,” *Известия отделения русского языка и словесности императорской академии наук.* XIV 1909, 1/2, pp. 181-266.

Долобко, М., “О языкѣ нѣкоторыхъ боснійскихъ грамотъ XIV в.,” *Известия отделения русского языка и словесности императорской академии наук.* XIX 1914, 3, pp. 217-260, 4, pp. 1-29.

Belić, A., “Čakavski Dijalekt,” *Narodna Enciklopedija srpsko-hrvatsko-slovenačka.* 1925, pp. 413-417.

Brozović, D. & P. Ivić, *Jezik, Srpskohrvatski/ Hrvatskosrpski, hrvatski ili srpski,* Izvadak iz II izdanja Enciklopedije Jugoslavije. Zagreb 1988. (本文中 EJ : チャ方言の記述は Brozović なので該当する箇所は本文中 Brozović 1988 とした)

Carlton, T., *Introduction to the phonological history of the Slavic languages,* Slavica, 1990.

Ivić, P., *Die Serbokroatische Dialektologie. Ihre Struktur und Entwicklung,* I. Mouton, 1958.

- Kopečný, F., *Základní všeslovanská slovní zásoba*, Academia Praha, 1981.
- Peco, A., *Pregled Srpskohrvatskih dijalekata*, Beograd, Naučna Knjiga, 1985.
- Resëtar, M., “Die čakavština und deren einstige und jeztige Grenzen,” *Archiv für Slavische Philologie*. Bd 13, 1891, pp. 93-109, pp. 161-199.
- Samilov, M., *The phoneme JAT' in Slavic*, Mouton, 1964.
- Shevelov, G., *A prehistory of Slavic. The historical phonology of common slavic*, Heidelberg, 1964.

## “Five Language Dictionary” of Faust Vrančić; and the Čakavian Dialect

Keiko MITANI

In 1595 appeared a dictionary titled ‘*Dictionarium Quinque Nobilissimarum Europæ Linguarum, Latinæ, Italicæ, Germanicæ, Dalmatiæ & Ungaricæ* (Dictionary of the five most famous European languages, i.e. Latin, Italian, German, Dalmatian and Hungarian)’ in Venice. The author, Faust Vrančić, who was born in Šibenik, called his own native language “Dalmatiæ” and chose it as a representative of the Slavic languages in his Dictionary. The city of Šibenik is located on the Adriatic coast and it is quite possible that *Dalmatiæ* was one of the South Slavic dialects, Čakavski, still spoken in the northwestern parts of Dalmatia and some islands on the Adriatic Sea in Croatia. The Čakavski, i.e. Čakavian dialect is known for its archaic accent, and phonological and morphological peculiarities sometimes quite different from the standard Štokavski languages (standard Serbian, standard Croatian).

In this paper phonological features of *Dalmatiæ* in *Dictionarium* are examined; lexical items of *Dalmatiæ* indeed show a series of phonological features corresponding to those of the contemporary Čakavian dialect.